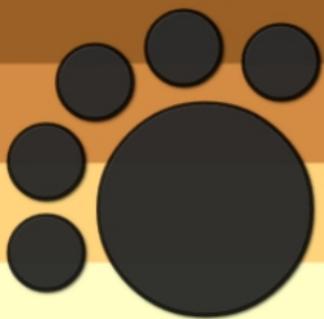


雪男

山牧田 湧進



まえがき

【ご注意ください】

・ この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。

・ この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。

・ この作品は必ずしも現実に即しているとは限りません。強調したいところを重点的に書き、不都合なところは端折っています。あくまでもファンタジーであることをご理解ください。

・ 特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除して記述しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。

【あらすじ】

雪国の共学制高校の寮、卒業まで最後の一週間。ただの友達だったはずの仲間内に一波乱が起きた。身体は大人以上に大柄でも、まだまだ学生気分だった雪男（イエテイ幸央）はその出来事を中心人物となり、否応なしに大人への階段を一步、登ることになった。

【目次】

第一章	『雪男』	5
第二章	きっかけ	9
第三章	連続する告白	14
第四章	対等な勝負	30
第五章	懺悔	40
第六章	僕の想い	55
第七章	卒業、そして	71

雪男

第一章 『雪男』

冬の北国は、雪に閉ざされると何もすることが無くなる。

高校三年生の冬、寮で過ごす冬はこれで最後だ。

進学を希望するものは、そんな風にのんびりと感慨に耽る暇も無く、受験勉強に勤しんでいる。

そうでないものは毎晩、自然と居室へと集まってくる。

個室にはベッドと机と勉強道具しかない。何をするわけでも、何ができるわけでもないこの薄ら寒い空間に独りで籠っている意味は全く無い。

だから、みんな居室に集まって就寝の時間まで、遊んだり話したりして暇を潰すのは当たり前のことだった。

僕の幼馴染でもあり、家業を継ぐと言う、亮太。やはり家業を継ぐために実家に戻ると言う、良和。雄大と和枝はとりあえず一旦東京に出て自活してみたいと言っている。博美は東京に出るつもりも無いが、他に特にすることも無いので、差し当たり実家で家事手伝いをするのだそうだ。そして、僕、幸央は、これからのことについて、未だに何も決められていない。

僕は優柔不断で、いつもなんとなく亮太にくっついて歩いて歩いている、そんな子供だった。そして、それはそのまま高校まで引き摺って、亮太と同じ高校へ進学、そして入寮までしてきた。

亮太はそんな僕を特に嫌がるでもなく、普通のこと、当たり前のこととして思っているみたいだった。

僕はちよつと目立つくらい大柄で、おっとりとしているものだから雪男「イエティ」というあだ名が付けられていた。名前も漢字が違うとはいえ、読みはまんまだ。雪国の生まれでちよつと出来過ぎなくらいのキャラの嵌まり具合が、唯一、僕をハッキリと定義付けるものだったかもしれない。

僕は気の利いたことも言えない、口数も少ないつまらないキャラだったが、みんなは仲良くしてくれた。「イエティはそれで良いんだよ」って、みんな言ってくれる。僕の方も、ただ、みんなの話が聞けて、ニコニコしていれば良かったから気が楽だった。

亮太は一応、居室には集まってくるものの、それほどみんなに迎合しようと

いう意識はないみたいで、話題からあぶれても平気な顔をして、我関せずといった感じだ。それでなくても亮太にはいつも、独立心の強さと決断力の高さを見せ付けられていて、みんなの中でも頭一つ抜け出して大人の雰囲気漂っている。

良和と雄大はちよつと敵対心があるみたいだ。ちよいちよい、言い争いになる。大抵は些細な事柄について、俺の方が優れているという見栄の張り合いで、こんな小さなことで男の闘争本能を剥き出しにするなって博美と和枝にたしなめられるのが落ちだった。

博美は若干すれた感じがする女性だ。綺麗な外見をしているから、都会へ出たらさぞかしモテるだろうにと思うのだが、本人曰く、もうそういうのはうんざりなんだとか。だから、都会に出る気はさらさら無いと言っている。

対して、和枝は夢見る乙女だ。容姿は平凡で、考え方もごく普通の女子高生の範疇に納まるのだろう。未知の都会に憧れて、そこには夢のような生活が待っていると信じて疑わない、ある意味幸せな女の子と言えるだろう。

雪男

Author 山牧田 湧進
(Yamakida Yuushin)

Circle Gradual Improvement

URL graduali.blogspot.jp

個人で楽しんでいただく作品です。

個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、共有、アップロード等はしないでください。

(こちらは体験版です。)